

# グッドナイト&グッドラック

2006(平成18)年7月23日宣伝用ビデオ鑑賞(5月13日からナビオ TOHO プレックス他で上映)

★★★★★



監督・共同脚本＝ジョージ・クルーニー／製作総指揮＝スティーヴン・ソダーバーグ／プロデューサー・共同脚本＝グラント・ヘスロヴ／出演＝ジョージ・クルーニー／デヴィッド・ストラザーン／フランク・ランジェラ／ロバート・ダウニー・Jr.／パトリシア・クラークソン／グラント・ヘスロヴ／ジェフ・ダニエルズ／レイ・ワイズ／ジョセフ・マッカーシー上院議員(本人)(東北新社配給／2005年アメリカ映画／93分)

……今日まで語り継がれている伝説のニュースキャスターがエド・マロー。1953年マッカーシー上院議員による「赤狩り」旋風の恐怖の中、「報道のCBS」の名と報道人としてのプライドを賭けた彼のニュース番組は敢然とこれと対決。それから半世紀、今の日本のテレビ事情はエド・マローが憂えたとおり、娯楽を詰め込んだただのboxに成り下がっているうえ、MやFそしてTキャスター(?)たちの専横ぶりはあまりにひどいもの……。今や一億総白痴化とともに、一億総洗脳状態に……。そんな中、この映画の価値は計りしれないが、国民がバカなら宝の持ち腐れ……。マスコミ関係者をはじめ、学生以上の知識人必見の映画だが、さてあなたはこの映画から何を学ぶ……？

## マッカーシー上院議員による「赤狩り」の恐怖と対決！

この映画は、1950年代前半に吹き荒れたジョセフ・マッカーシー上院議員(本人)による「赤狩り」旋風の恐怖に対するジャーナリストたちの良心を描くもの。「マッカーシズム」と呼ばれた、共産党とそのシンパ(同調者)を徹底して洗い出す赤狩りの恐怖は、アメリカ社会に密告や告発そして転向宣言を蔓延させ、国民相互の疑心暗鬼を生み出した。そしてこれは、今でもアメリカの「恥ずべき時代」として人々の心に残っているもの。

この赤狩り旋風の中、映画館「マジェスティック」の再建と「表現の自由」を

保障した合衆国憲法の価値を感動的に描いた映画が『マジェスティック』（01年）（『シネマルーム2』147頁）だったが、この『グッドナイト&グッドラック』は、報道の世界からマッカーシーによる赤狩りとの対決を描いた感動作。

### 「報道の CBS」とは……？

アメリカの三大ネットワークは、コロンビア放送（CBS）、ナショナル放送会社（NBC）、アメリカ放送会社（ABC）の3つ。1950年代はテレビの黎明期だが、そんな時代状況の中、エド・マロー（デヴィッド・ストラザーン）がニュースキャスターをつとめる CBS の人気番組が『シー・イット・ナウ』。エド・マローはラジオニュースの記者としてヨーロッパに渡り、1940年代初頭のナチス・ヒトラーによるヨーロッパ侵攻の様態を伝えたが、これが「大洋をつなぐ架け橋」と言われて、国民の注目を集めた人物。

第2次世界大戦後アメリカに戻ったエド・マローはプロデューサーのフレッド・フレンドリー（ジョージ・クルーニー）と意気投合し、1951年、CBS のテレビニュース番組『シー・イット・ナウ』をスタートさせた。時事問題に真っ向から取り組んだこの番組は、現在の報道番組の礎を築いたものとして今でも高い評価を受けているとのこと。そしてこの『シー・イット・ナウ』の大成功によって、CBS は「報道の CBS」と呼ばれるようになったとのこと。

### エド・マローのジャーナリズム史における足跡は？

この映画はマッカーシー上院議員と対決した1953年当時のエド・マローの姿を描いているが、エド・マローは1965年に57歳の若さで死亡するまでアメリカのジャーナリズム史に大きな足跡を残した。ちなみにこの映画を観ていると、はじめから終わりまでエド・マローはタバコを吸いっぱなしだし、酒の量も多そう。こんなタバコまみれの不健全な生活状態では、ガンによる早死にも当然と思えたが……。

それはともかく彼の足跡の第1は1961年にジョン・F・ケネディ大統領の要請によって、米国広報・文化交流庁（USIA）の長官に就任したこと。そして第2は、圧力に屈せずひたすら真実の追求を目指した彼の報道スタイルが後のジャーナリストたちの指針となったこと。ちなみに、その後の CBS の人気報道番組

『60ミニッツ』は、ラッセル・クロウとアル・パチーノが主演し、タバコの有害性を告発して大きな話題を呼んだ映画『インサイダー』（99年）（『シネマルーム1』46頁参照）にも登場するから要注目……。

## 大嫌いな日本のニュースキャスターたち……

日本ではニュースキャスターとしては、久米宏、筑紫哲也、鳥越俊太郎、小谷真生子そして古舘伊知郎らが有名だし、田原総一郎やみのもんたも独自のスタイルでテレビ界に君臨している。今年4月の番組改変によってNHKの夜10時のニュースがなくなったため、今は10時台のニュースは『報道ステーション』しかないが、そこでの古舘伊知郎のいかにもカッコをつけたニュースキャスターぶりが、私は大嫌い。現場からの報道やVTRで流されるものは観ているが、スタジオ内に座った彼の顔が映り、いかにもしたり顔で彼がコメントしている姿を観ていると、気分が悪くなるので、リモコンで他のチャンネルへ切り替え、というのが昨今のわが家の実情……。

私の印象が比較的良いのは、筑紫哲也や鳥越俊太郎、そして1番好きなのは小谷真生子。まあニュースキャスターの好みは人それぞれだろうが、私が大切な基準としているのは、今やニュースキャスターは絶大な「権力」を持っていることを十分自覚し、大衆受けするええカッコばかり言わないこと。

他方、日曜日の朝10時から、ほぼ確実に田原総一郎の『サンデープロジェクト』を観ているが、最近の彼の専横ぶりとボケぶりは際立っている感じ……？さらに朝6時半頃起きたときのテレビはNHKと決めているが、時折ニュースを観るのに便利なのが、みのもんたが司会する6時台後半の『みのもんた朝ズバッ!』。しかしこれもスタジオ内に立つみのもんたが映り、しゃべり始めるとすぐにNHKに切り替え。なぜ日本にはエド・マローのようなすばらしいニュースキャスターが生まれないのだろうか……？

## 最初の攻防戦は？

CBSのエド・マロー＋フレッド・フレンドリーのチームによる、マッカーシーの「赤狩り」に対する最初の対決はマイロ・ラドゥロヴィッチという空軍兵士

の除隊処分の是非をめぐるもの。その処分には何の合理性もなく、処分の理由は彼の父親と姉が共産党員だと嫌疑をかけられたためだが、それを番組で取りあげることには大変なこと。CBSのナンバー2のシグ・ミッケルソン（ジェフ・ダニエルズ）はこれに反対し、スポンサーも広告費を拒否するが、マローとフレンドリーは自費で広告費を負担してまでも放送を強行。その結果、後にマイロ・ラドゥロヴィッチ兵士の除隊処分は撤回されたものの、ここからマッカーシーとマローとの対決は決定的となった。そしてついに、マローは共産党のシンパだという資料の入った封筒がCBSの会長ペイリー（フランク・ランジェラ）のもとに送りつけられることに。さて、その後の攻防はどうなるのだろうか……？

### 手に汗握る攻防戦は歴史に残るもの……？

マロー VS マッカーシーの直接対決の第2ラウンドは1954年3月9日の番組。これはマッカーシーの過去のスピーチをトコトン洗い直した上で、その虚偽性と策謀ぶりを実証していくもの。その結論は、「アメリカは世界において自由の旗手であるが、国内の自由をないがしろにしてはならない」というものであり、最後を締めくくる言葉は淀川長治氏の名文句「さよなら、さよなら、さよなら」と同じようないつものマローの名文句「グッドナイト&グッドラック」……。

こんな「バクチ的番組」を放送し終えたスタッフたちは、その夜は明け方までバード「打ち上げ」をやっていたが、集めてきた朝1番の朝刊各紙の記事は……？  
続いて第3ラウンドはその翌週、国防総省で働く黒人女性の共産党疑惑に関する公聴会の模様をレポートして、マッカーシー陣営の不当な追求を暴くもの。

第4ラウンドとなったのはこれに対するマッカーシーの反撃で、それは1954年4月6日。マッカーシーはマローが反撃を保証した放送の時間帯をいっぱいを使ってマロー攻撃を展開したが、さて国民の反応は……？ 公共の報道ニュース番組の中で言論をもって徹底的に論じられるマロー VS マッカーシーの攻防戦は実に見ごたえがあり、手に汗握るもの。皆さんもその迫力に思わず身を乗りだすこと確実……。

### 勝利の次には更なる試練が……

マッカーシーとの闘いは、上院がマッカーシーを公聴会に召喚するとの声明を

出し、マッカーシーが委員長の座から降ろされたことによって決着がつき、赤狩り旋風は終焉を迎えた。マローたちの、いかなる圧力にも屈しない良心的報道が勝利を得たのは、まさにマローたちの民主主義と報道の自由を求める執念によるものだった。ところがマローたちにはその勝利の次には更なる試練が……。

それはテレビの大衆化、娯楽化という赤狩り以上の大問題。お固いニュース番組は製作費がかかるうえ、広告主がつきにくいのに対し、クイズを中心とした大衆向けの娯楽番組は安上がりであるうえ、スポンサーががっばりと……。まさに今の視聴率を万能とする日本のテレビ界が陥っている病状がこの頃から現われ始めたわけだ。そこでまずペイリー会長がとった方策は、第1に『シー・イット・ナウ』の回数減らしとゴールデンタイムから昼の時間帯への移動。そして第2に人員減らしの策として、社内結婚が禁止されているにもかかわらず、事実上婚姻状態にあったジョー・ワーシュバ（ロバート・ダウニー・Jr.）とシャーリー・ワーシュバ（パトリア・クラークソン）のうち1人を退社させること。

その他、この映画の中に現われなくても、その後CBSが「報道のCBS」という誇りを少しずつ捨て大衆化・娯楽化路線に進んでいったのは、いわば歴史の必然……。パンフレットによれば、1958年にマローが報道番組制作者協会でジャーナリストの退廃を憂えるスピーチを行ったことがCBS経営陣との溝を決定的なものとし、以降マローはジャーナリストとしての活躍の場を追われたとのことだ。

## 今こそマローのスピーチの教訓を！

この映画の冒頭とラストは、この1958年の報道番組制作者協会でのマローのスピーチのシーン。多くの関係者を前に、「今日は皆さんに耳の痛い話をしなければなりません」から始まったマローの演説は、ホントに激辛のもの。そして締めくくりは「何とかしなければテレビはメカのいっぱい詰まったただのboxになり下がってしまうでしょう」というもの。このマローの演説における教訓は今から約50年前のものだが、アホバカバラエティー番組全盛で、まさにテレビは1億3000万人の日本国民を総白痴化させるためのboxになり下がってしまった感がある今こそ、改めてこの教訓を思い出さなければならないと思うのだが……。

2006(平成18)年7月24日記